明石の史跡（６０）大蔵谷の叡尊

弘安８年（１２８５）７月２３日、８５歳の叡尊は、播磨の法華山一乗寺（加西市）にむけて、奈良西大寺を出発。ここ２～３年間で７度におよぶ、熱心な勧請に答えるためである（以下、出典を明記しない場合は『感身学正記』による）。

２４日、尼崎。２５～６日は芦屋。そして２７日に、明石に到着する。早速「堂」において、供養法（くようぼう）を修した。供養法とは、仏にたいする各種の奉仕。たとえば、『花鳥余情』（かちょうよせい＝一条兼良の筆になる、室町期の源氏物語の注釈書）にあるように、三宝・父母・師長・亡者や、自身の仏道精進のための行い（つとめ）を意味する（中村元著『仏教語大辞典』上）。ただ、供養法がおこなわれた場所（寺院）については不明である。

一乗寺よりの帰途、８月１０日に大蔵谷にて一泊しており、大蔵谷が、当地方における整備された宿泊施設であったことがうかがえよう。

叡尊が足跡をしるしてから３年後の正応２年（１２８９）６月１日、阿波国（徳島県）で発病した一遍（智真）は、７月はじめに福良（三原郡南淡町）に渡り、淡路島を駆け抜け、同１８日に明石の浦に至るも、人々に教えを説く間もなく、兵庫の島より迎えの船に乗り、早々に明石を立ち去った（『一遍聖絵』岩波文庫）。

建永２年（１２０７）２月１８日、土佐国配流となった法然（源空）。途中、兵庫の経島（神戸市兵庫区）や、高砂の浦（高砂市）では、多くの人々に結縁した（『法然上人絵伝』下／岩波文庫）。結縁とは、仏道に無関心な人にも関心を持たせて関係づけることである（中村元前掲書）。明石が欠落しているのは、父漆間時国を殺めた人物（明石定明）の故郷であったからなのだろうか。

一遍・法然に比して、明石の人々に、供養法を説いた叡尊に、筆者は親近感を覚えるのである。

日本歴史学会会員 茨木 一成